

農作業体験活動を取り入れた公園緑地の計画と運営 に関する研究

徳永, 哲

<https://doi.org/10.15017/1654895>

出版情報：九州大学, 2015, 博士（芸術工学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏 名	徳永 哲			
論 文 名	農作業体験活動を取り入れた公園緑地の計画と運営に関する研究			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	包清 博之
	副 査	九州大学	教授	近藤 加代子
	副 査	九州大学	准教授	朝廣 和夫

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、都市近郊の市街化調整区域に位置する農耕地が、都市住民の身近な自然とのふれあいの場として活用される事例が増えてきていることに着目し、2つの主な研究目的が設定されている。第一の目的は、農作業体験活動を取り入れた公園緑地の意味や適地選定、形成過程について分析し、農作業体験活動の支援に資する公園緑地の計画条件と課題を明らかにすること、第二の目的は、都市近郊地域において開設された公園緑地における農作業体験活動の運営内容とその仕組み、周辺地域との連携を含む公園緑地運営の展開に資する検討課題を明らかにすることである。

調査・研究の対象地は、第一の目的に対応して、農耕地が存在する市街化調整区域で農作業体験活動が既に展開していた福岡市西区の金武地区が設定され、第二の目的に対応して、農作業体験活動を取り入れた都市公園として2012年6月に供用開始された「かなたけの里公園」が設定されている。具体的な研究内容は、構想・計画段階から「かなたけの里公園」の供用開始以降の3年を含む10年間のアクションリサーチを通じて調査・検討された内容で構成されている。

第1章「序論」では、既往研究や文献等の調査・分析を通じて、研究の背景として農作業体験活動を扱った研究近年の研究動向、関連用語の位置づけ、本論文の研究内容の意義、農作業体験活動を取巻く現況と課題の認識が明確に示された上で、研究の目的、研究の視点と構成が示されている。

第2章「農作業体験活動を取り入れた公園緑地に関する視点の整理」では、基礎文献を用いて、農作業体験活動にまつわる一般的な動向ならびに都市公園の整備運営を巡る社会的要請の変化が整理されている。その結果として、農作業体験活動を取り入れた公園緑地のあり方、都市住民と地域住民とがその環境と景観の価値に気づき、より協力的に活動できるような支援条件、市街化調整区域で、農作業体験活動を取り入れた公園緑地が果たす役割や効果などを明らかにする必要があることが示された上で、本論文の主な研究方法としてのアクションリサーチの有効性が示されている。

第3章「農作業体験活動に適した公園緑地の計画に求められる条件」では、第一の研究目的に対応し、農作業体験活動が既に展開していた福岡市西区の金武地区（金武小学校区）を対象とし、地域住民および農作業体験活動の参加者に対するアンケート調査や地図分析を通じて、市街化調整区域内での市民による良好な農作業体験活動に適した公園緑地の計画に求められる条件を明らかにするための研究アプローチを展開している。結果、①農作業体験活動の農地だけでなく周辺の田畑の広がりや山々などの農村環境が豊かに存在すること、②参加者同士や参加者と地域住民との交流の場が確保されていること、③農作業体験活動に関する学習機会の確保や情報提供を行うこと、④緑を認識する可能性が高い公園や街路に近い農地を対象とすること、⑤農地の管理が比較的容易で継続的に参加できる可能性が高い狭い農地を対象地とすることなどを明らかにすると共に、多面的機能を有する農村環境の中に位置する活動場所と、地域住民・参加者の双方との交流を伴う活動

運営とが、農作業体験活動を通じて関連付けられることの重要性を検討課題として抽出している。

第4章「農作業体験活動を取り入れた公園緑地計画」では、第一の研究目的に対応し、金武の地域づくり・地域振興ワークショップの活動記録などの分析を通じて、2012年6月に供用開始された「かなたけの里公園」の整備・開設に至るまでの過程に着目し、公園予定地における試行的農作業体験活動の取り組みの過程、農作業体験活動を取り入れた公園緑地の形成過程や地域住民の合意形成過程、農作業体験活動支援への住民参画の意思決定過程を明らかにするための研究アプローチを展開している。結果、地域住民とのまちづくりワークショップや公園予定地環境管理における共働作業を通じて、地域住民がその環境を誇りに思うとともに地域活性化へ向けて保全活用したい意向を共有し行政に対して明確に示したことが、「かなたけの里公園」の設置に至る事業化への大きなきっかけとなったことを明らかにしている。

第5章「かなたけの里公園における農作業体験活動の運営」では、第二の研究目的に対応し、「かなたけの里公園」の供用開始後3年間における農作業体験活動を主体とする運営プログラム（施設規模、活動の利用料金、活動の内容など）とアンケート調査で把握した農作業体験活動参加者及び関係者の満足度などの分析を通じて、農作業体験活動支援の展開の実態や活動効率の指標を用いて、3年間の経過を整理し、指定管理者と地域住民との共働体制のもとに運営される公園緑地が果たした成果を明らかにするための研究アプローチを展開している。結果、年間を通して季節に応じた農作業体験プログラムのバリエーションが豊富なことや地域住民と運営管理者との共働体制の中で農作業体験活動プログラムが企画・立案され実施されていることが参加者の満足度の向上に重要であること、体験プログラムの企画意図に対する理解のしやすさが参加者・地域住民・運営管理者の三者の間で共有できることが体験プログラムの発展の動機づけとなること、対象とする農作物の種類によって参加者や維持管理者及び農作業体験活動指導者にとっての適正作業量、適正面積、適正人数に差があることなどを明らかにしている。

第6章「結論」では、前章までの結果の総括を踏まえ、農作業体験活動を取り入れた公園緑地は、農家を含む地域住民と運営管理者の取り組みによって、活動支援体制の構築と緑地環境管理の両立した自主的な運営能力が高まること、またその共働体制の発展は周辺地域の環境に対する自主的なマネジメントの展開への波及効果を形成する可能性があることを示唆すると共に、今後の検討課題に言及している。

以上から、博士（芸術工学）の学位に値すると認める。